

一

天保年代の全國的飢饉が其の慘憺の極に達した同八年の二月大阪に大鹽平八郎の騷動のあつた事は、普く世に知られてゐるところである。しかし、同じ年の五月に越後柏崎に起つた殆んどそれと同じ一大騷擾事變については、知る人極めて稀である。私が今こゝに紹介しようとする生田萬といふ人物は、實にその騷動の張本人である。そして彼及び彼の一家はその騷動の結果、此上もなき悲壯な最後を遂けたのであつた。

此の生田萬といふ人は、しかし其の土地の人ではなくて、生國は上州であつた。彼は同國館林の城主松平齊厚の藩士生田信勝の長子として享和元年其家に生れた。幼名を雄といひ、長じて萬と改めた。諱は國秀、字は救卿、東華又は大中道人と號し、外に生田首道麿、菅原道満、陶篤道、東寧山人、華山、暎、利鎌の舎、櫻園、かゞみのむろ（鏡室）等と稱した。父信勝は藩の大戸從頭まで進み、百三十石の祿を食んでゐた。

萬、天資勇邁にして英敏であつたと傳へられてゐる。少年時代からどちらかといふと頭が銳敏であつた上に、ひどく情に激し易い多血質の人であつたらしい。彼がいかに學問に長じてゐたかは、十八、

九歳にして既に烏有文集と題する著書のあつたといふ一事によつても窺ふことが出来る。なほ彼の少青年時代に於ける學歴の一班は、二十一歳（文政四年）の時に彼の著した「大中道人謾稿」の自序が最も多くを語つてゐる。今その全文を訓譯して見ると、次の如くである。

「詩賦文章之道、人と相似る久し。初め余八九歳、藩學に入り師友に就て誦讀す。二三年の後漸く四子五經を講習す。未だ其の趨向する所を知らず。たゞ師友の爲すところに倣ひ、専ら宋人の性理學を攻す。稍々得る所あり。乃ち詩文を學び、以て義理を述べ意興を敍せんと欲す。而も藩制最詩文の學を禁す。師友の余を羽翼する者なく、而も藏書亦少し。左國史漢尙ほ之を人に借りて讀む。又明季李三氏の著す所を取て之を倣ふ。亦稍得るところあり。十五六篇之を學び之を好む。一日著述四五首を率ふ。是を以て篇卷を成し、卷帙を成す。名づけて雞助日鈔と曰ふ。蓋し千餘篇を下らす。一旦性理學の屑々たるを厭ふ。自檢人を譴し、大に天人を譚る。而も時事に切ならず、必ず復た專攻せず。是を以て師友余を譴することしばくなり。然り而して余尙獨學倦ます。偶々廢饑を探り、家大祖著す所の大中經を得たり。一讀して之を疑ひ、二讀して之を信じ、遂に之を奉する年あり。最其道を樂み、生死たゞ此經に據らんと欲す。其の之を好みて之を樂む、之に向ひ學ぶ所性理詩文に若かざるなり。然も之に向ひ好む所亦棄つべからず。著述益富む。然も倣ふ所李王氏の

み。故に剽掠盜竊、奇怪艱險し君子の爲すべき所にあらざるなり。十八九忽ち復之を厭ひ、自ら著す所一二を選び、名づけて烏有文集と曰ふ。自ら烏有と稱するは、藩制の禁する所を避くるのみ。今茲余二十一、又一卷を得、名づけて大中道人謾稿と曰ふ。後の得る所は將に續編たらん。然りと雖余や不敏、趨向定らす。是を以て其著す所亦曹劉李杜王孟に非す、左國史漢に非す、韓柳氏に非す。以て名くるに足らざるのみ。況んや獨學寡聞、藏書尙ほ乏しき者に於てをや。古の君子の彬々篇を成し、轟々乎として當世に鳴る者と、天淵相隔るなり。然りと雖今苟も之を厭ふに至らず、則未だ必しも之を棄るに忍びざるなり。夫れ余既に師友の譴を被る。故に門戸を閉ぢ以て大中經を讀み、又時々詩を賦し、文を屬し、從容自ら樂み、自ら達る。是を以て死して而して足る。豈師友の爲す所に倣て利を射し祿を求めるや。

文政四年辛巳二月既望

館林

生田瞭撰并書

これによつて見ても、彼が少年時代からいかに好學の徒であり、且いかに負けず嫌ひな人間であり、更にその爲にいかに孤獨な、そして不平の多い、ね者であつたか察しられる。

ところで、そのやうな狷狂に近い一個多感の青年であつた彼が、一方に祖父の著書大中經に耽讀し

て一種の陽明學的思潮の感化を受けつゝあつた間に、他方彼の和歌の師であつた大江務義（翠園大人と號す）によつて、加茂眞淵・本居宣長等の著書に接する縁を得、更に平田篤胤の著書にまで接するに及んで、一躍して彼は皇學精神の奔流へと身を投するに至つた。その頃の彼の精神生活の變轉については、「杉山鋒磨と古學をあけつらへる歌」（歌集の部参照）と題するすばらしく長い長歌で彼自ら語つてゐるところによつて、最も鮮やかに知ることが出来る。

彼はその中で自分が漢學から轉じて國學を學ぶに至つた經路を物語り、且「自分は幼い頃から漢學を學んで來たが、學びながらも何となくそれに不満があつた、その不満の理由は國學を學ぶに及んで始めて釋然とした」といふやうなことをも告白してゐる。

なほ彼は、文政四年三月三日、夢の中に今上天皇を拜し奉り感激の涙に咽んだといふことを、長歌並に詩を以て歌つてゐるし、又「雷をよめる歌並にみじか歌」と題して、彼は時代思潮に對する彼自らの憤懣を心のくばかり歌つてもゐる。就中後者に於て彼は口をきはめて雷神の威力を讃美し、眞に大和魂を胸の底にかためて世の革新にあたらうとする者は、まさに此の雷神の荒魂を心に得べきであるとまで叫んでゐる。

彼のかうした激越な尊王主義的革新思想は、更に文政六年十月即ち彼の二十三歳の時、日光なる東

照宮に詣でた折に詠んだ長歌並に反歌に至つて、一層具體化した表現を示してゐる。

神蔑かさうひ君ごろへりと見ん人のありやあらずやこれの大宮

金銀珠玉をちりばめた東照宮の豪奢な粧ひを眺めて彼の胸中に燃え上つた憤懣の情のいかなるものであつたかは、此の一首の反歌によつてもほど窺ひ知ることが出来るのである。

なほ多少蛇足の觀があるが、何等かの参考ともならうかと思つたので、こゝにその折の彼の紀行の全文を掲げて置くことにした。

夢路の記

下野の國、都賀郡、二荒山に鎮まりますあつまるかひみおやのふこと東照神御祖命のおほみやを、拜み見まくおもひて、
としごろありつるに、ことしのかむな月に、おのがやからなりける白井の正貞を、ふたあら山のふも
と、鉢石の郷なる、杉江氏のむこがねにと、かたみにいひかはして、その五日といふ日に、出たつこ
となりぬ。かれそのうからやからなる白井の正邦、田口の秀實、おのれらもろともに、正貞をおく
りゆきて、大宮をもをがみ奉らばやとおもふに、君に親に仕へ奉れる身は、おのがまにく旅寢かさ
ねむことのかしこければ、いかにともせんすべなく、おもひつかれてうまいせしに、いめにやありけ

む、おのものゝ旅よそひして、うまやぢの馬ひきたてゝかしまだちせしころは、なほあけやらぬ空の
けはひに、手火の光に此館林のさとを出て、

うまやぢの鈴のとすなりくさまくら

旅ゆく人の勇みあるべく（鶯和歌）

とうちうたひていゆきつゝ、渡瀬川を打わたるころは、かけも鳥もしば鳴きて夜はしらみたりけり。
是よりしもつけぬのくに、あそ郡なる佐野にて、馬のはなむけせし人々にわかれて、犬伏のさと
をゆきすぐれは、やがて都賀のこほりにいりて、山々まぢかくそびえ・千しほ一しほにもみぢせる木
々のこもりかるを、朝霧のたちかくしたる、春霞の棚引たらむがごとし。

朝ぎりよさのみなたちそもそもみぢ葉の

おくある山に見まくおもふに（高まり仰たんり）
すべて此わたりは、富士・つくば・あさま、ふたらの山々などを四方に見さけていとおかし。毛呂
をすぎて、富田といふは、我殿のしらせるところなり。こゝにはなさけうるくぐつありて、家ごとに
端居して、草の枕にあだなる契をむすびゆく人を、まち顔なるもはかなしや。

くさまくら旅のかりねの一夜のみ

妹とやすらむせとやいふらむ

そこをすぐれば、つねには北にのみ見さくる二荒の山は、やうやくに西北のかたにみなされて、其
いただきにはみゆき白かり。いで其さまを、道行きぶりにつじけむとおもひしかども、ながめはあま
りありて、言葉たらはず・かれ、ことさまなるかみをめぐらす歌ぞ出來にける。こは道麿が歌よむ心
おきてにてしひてくるしく詠み出むことのくちをしければ長くもあれ、短くもあれ、おもふまに／＼
つじけたるなり。

まさをなる二荒の山に雪の白きを

見の寒みいゆかむ旅の道とほみかも

柄木といふに着きぬ。こゝはあき人の家居もよろしく、はた山川をせきて、其さとのみなかに、細
きながれありて、其水いと清かり。其ほとりには、かきつばたさはにうゑおきて、時しらずかなたこ
なたに、さきにほひたるいとめづらし。世にかへり花といふは、かゝるたぐひなるべし。そもそも、犬
伏を出てより、をちこちのもみぢにのみ、目とまりてありつるに、かゝる花もにほひけるよとさへめ
でられて、

草も木もみぢせし世にむらさきの

いろめづらしきかきつばたかも

次々なる古宿、合戦場、金崎なども、おなじさまなるながれありて、かきつばたかまかすにほへり。このたびちには、花を見つることはさらになきを、此かきつばたなも、こよなきながめなりける。金崎を出て、小倉川といふあり。其水いと清く、流れいとたひらかなり。その次なる榆木といふにいたりしに、日は短く、道は遠ければ、山鳥もねぐらもとむる頃になりぬ。すなはちそこにやどりさだめき。

むゆかの日の朝まだきに、にれぎを出ぬ。こゝらわたりは、山々四方にたちつゝきて、紅葉のにはひいとよろし。

いづる日も八重にかくる、朝霧に

とやまの紅葉さやかにほふ（榆木ともみし）

けさはことさらにさむくて、山下風のはけしく、雲居を早み、吹しきるに、ふたらの山には雲たなびけり。

けさ寒み雪やふるらし玉くしけ

二荒の山に雲ぞたなびく

奈佐原、鹿沼をすきて、黒川といふあり。そこの橋をこえ、坂をのほりて、いさゝかゆけば、道のゆむでに、くえたるところありて、其上より見わたせば、はたひろあまりも眞したに、くろかはながれて、山々のもみぢのかけのうつりたるに、筏のうかびたるなど、いとをもしろし。

やま／＼の影をうかべて黒川は

いかだのみこそもみぢざりけり

文挟、板橋を行きすぐれば、杉江氏よりむかへ人ひとりふたりこせしに、はやくぞ來給ひし、なほあがきをはやめたまへなど、そゝのかされて、山ふところなる坂路をいそぎゆくに、行手の紅葉、風にちれるさま、雨や色づきけむとまどはれて、さかぢには、にしきをしきたらむがごとし。あはれのどけき旅ならば、をちこちの山路をもうちめぐりて、見まほしきを、さるいとまなければ、かへりて遠津山邊の紅葉を、吹まき來たれる山風も、けにくからずおほえたり。

風もふけもみぢも散れよ山わけて

にほひをしのぶたびならなくに

ほどもなく、今市につきぬ。こゝにもむかへ人まちてをり、いよいそぎゆけど、日はすでに行手の杉にかたぶく頃に、心いそしく鉢石につきて、まつ柴田氏なる人をとひて、酒のみ物くひ、旅よそ

ひぬぎすてゝ、杉江氏にゆきし頃は、寝よとのかねぞ聞えける。はじめてあへる人々なれば、かたみにゐやをこそかなれど、またゑらくゝにのりほざきて、ゑひくつがへりたるぞたのしきや。かけもおとづるゝ頃に、正貞のみをおきて、おのがともは、また柴田がりまかりてねぬ。
なぬかの日いざめてみれば、おもほえず日はたけたり。いそぎ杉江許行きぬ。さてけふは其うからやからをとひめぐり給へと、おのれにこはれしかば、そのよそひして出行きて、こゝに名だかき二荒川の橋をわたりて、其川を見れば、あるより青くながれて、みなかにたてるいはどもにくだけちるなみは、白玉のみだるゝごとく、其いきほひは矢のごとく、その音はいかづちかとあやまたれて、きもひゆるまでなるぞいさぎよき。

しもつけぬふたらの山のおびにせる

たぎつ御川にいはほしながる

(ニニ瓜川にて)

かくてやかすみそぢやあまり、かどごとにとびありきて、いやはてに、片岡氏をとひしに、さけよ酒菜よとあへせられて、いたくゑひにしかば、おもほえずひぢを枕にいをねぬ。さめてそのなめしかりしをうちわびつゝ、歸りくれば、日ははやふたらの山にかくれて、あめいたくふりく。正邦、秀實らはうちわらひつゝ、きみがおはさぬひまに、このわたりに名ぐはしき、霧降の瀧を見にゆきてなもかたみにわらひくつがへりぬ。かれ、たはぶれに

あなたはれねぢけ人等が霧ぶりの

たぎのさぎりのあめにひぢしは

(二郎霧降瀧にて)

やかの日、大宮ををがみ奉らむとて、もろともに出行きて、きのふわたりし橋をこえて、やゝのほりゆきて、二荒の神のみやしろのみまへを、をがみまつりき。そもそも此二荒の山といふは、茲より三里ばかりへだりて、山の上にみづうみたえたる山ぞ、まことの二荒の山にて、そこにしづまりります御社なも、まことのふたらの御社なりける。こゝなるはうつしまつれるなりとぞ。されど二荒の山といふ名は、こゝらわたりをふさねたる名にて、此御社もふたらのみやしろとまをして、事代主の命、大巳の命、建御名方命を祭れるなれば、世には三社權現ともいふ。かくて三世の大まへつ君のみことの御宮に、くがねしろがねをちりばめて、てりかゞやけるみやづくりは、まをさむことはもなし。またおほみやにまるくれば、いよゝめでたく、うるはしく、つくり給へれば、ほめまをさむ

もかしこく、はたなにをもてかは、たとへまつらむ、よろづにたくみをつくされたるなど、ことごとにいはむは、わづらはしかし。こゝにまるりて、をがみ奉りたらむ人ぞ、あなたふと、あなかしこといひてむものぞ、かれひたふるにつゝしめるやまひつゝ、あらけまかりつ。これよりふたらのおほきみのみあらかを見ることえたり。まことにおほきみのみあらかばかりありて、すみかけわたしたるなど、いとたふとしや。杉江がり歸りてよめる。

東照あきる、みおやのみこと、御身づから、みはかしはかし、御手づから、みとらしとらし、青雲の、たなびくきはみ、たてぬきに、見めぐり給ひ、みいくさを、あともひたまひ、まつろへる、まめる國は、かむやはし、やはしたまひて、まつろはぬ、まがつやつこは、かむはらひ、はらひたまへれ、しきしまの、やまとのくにを、うらやすの、名におふ國と、みいざをゝ、たてたまへこそ、やすみしゝ、わがおほきみは、やすらげく、御代をばしらせ、みいさをの、いたりませこそ、たまくしけ、ふたらの山に、たひらげく、鎮まりませ、其宮を、をろがみ見れば、そのひざは、みそらにそびえ、御柱は、岩根にかため、おきぬみの、眞玉をかざり、おくやまの、くがねをゑりて、めもあやに、てりかゞやけり、いでやわが、すめらみことは、あまたらす、すめ大神の、ひさかたの、天津日嗣と、あめつちのいやとほながに、あめのした、しろしめしつゝ、あきつか

みと、いましながらも、ぬさむけて、いつきます世に、なりにけるかも。

かへし歌

神ごろひ君蔑へりと見るまでに

この大宮はつくらせりけり（东照）下にし

この御山の上には、社々さはに、つかさゝに仕へ奉る人どもあまたすまひ、あき人ものきをならべてをり、寺々はことにおほくて、もちまりありとぞいふ。すべてこのみやまのことは、ふみにも言葉にも、およばぬことのみにて、むかしともむかしき御山なりけり。

こゝのかの日、けさは正貞がうひかゝふりすとて、まだきより酒うちのみて、家ぬちことゝゝ、ゑまひふるまひき。かれ山によする祝といふことを、よみてをくれりける、

うつの名はよろづよまでにかゝりて

ふたらの山とともにたかけむ

そもそも、このたびぢは、のとやかに名ところなど、見めぐりて、心ゆく旅ならねば、けふ日はすでにたけて、うまの貝吹くころなれど、いそしくたびよそひとりしたゝめて、まさゝだにも家人にも、わかれをつぐれば、たもとをわかちがてなるもあり。日もたけぬ、とくゝといそがすもありて、杉

江がり立出れば、馬のはなむけすとて、おり来るもあり。それより家路の空さして、いそぎつとおもへば、これぞこのよはのうまいのいめにして、かけのこゑにおどろきさめぬ。

いめならばあまがけりしてもゆかましを

旅寢かさねしことのあやしさ

かくこよひのいめのいとあやしさに、おほえしまにくしるしおきて、このゝちの心なぐさとするにこそ。此さとより二荒の山までは、十まり八里とはいへど、はたちまりひとさとありて、やゝくにみさとばかりも、のほりゆくとなもいふ。

文政の六年といふとし、かむな月、とをかまりよかのひ、みつけの國、おはらきの郡、館ばやしのとの人、生田道麿しるす。

一一

かくの如くして、ます／＼深く國學の感化を受け、いよく激しく尊王的革新思想に動かされつ、あつた生田萬は、つひに文政七年、二十四歳の時、抑へ難い敬慕の念に驅られて江戸なる平田篤胤の門へと走つたのであつた。

青海原しほの八百重の八十國につぎてひろめん此の正道を

これは萬が初め篤胤の門下生たらんとするに際して篤胤に獻じた歌であるといふ。以て當時に於ける彼の抱負の一端を窺ふことが出来る。

篤胤は快く彼を門下生の一人に加へたと同時に、間もなく彼の才學の非凡を認めて塾頭にまで採用した。當時篤胤は湯島に住んでゐた。萬は赤坂の假寓から毎日そこへ通つたのであつた。

その頃の彼の生活については、私は嘗て「生田萬の歌と其の人」と題した文章の中にかなり詳しく書いて置いたから、以下少しばかりそれを抄することにする。

「そんな風であつたから、篤胤もひどく彼を愛し、時には人に向つて「我が後を繼ぐものは必ず此の萬である」といふやうなことをも誇稱することさへあつたとか、又内心其愛娘の婿にしようとまで思ひ定めてゐたが、娘の方で萬を嫌つたのでつひその事は沙汰止みになつたとかいふやうな事が傳へられてゐる。『生田の旗風』によると、萬が篤胤の女に嫌はれたのは、彼の風貌が眼光炯々眞骨稜々といふ、どちらかといふと女好きのしない方だつたといふことである。

「しかし、どの道、彼はさうした恵まれた平和な境遇に甘んじてゐることの出来る人間ではなかつた。學問に於て、また思想に於て、彼はそれ程深く篤胤の感化を被つてゐたとはいへ、到底師と同じやう

に講學の一途に没入してゐることの出来るやうな冷靜さは持つてゐなかつた。寧ろます／＼深く説く道に心を寄せれば寄せるほど、いよいよ激しく彼は時勢に對する憤懣を感じないではゐられなかつた。

師の唱ふる敬神尊王の大義によつて彼の精神が日に日に高潮すると同時に、徳川幕府の秕政に對する彼の反抗心は刻々にその激しさを加へて行つた。或は文に、或は詩に、彼は日としてその悲憤を洩らさない事はなかつた。時には堂々と討幕の檄に擬する文を草して、自ら誦し、又他に示して、彼は激昂自らいさぎよしとするやうなことさへ度々あつた。

「かうした彼の危激さには、流石の篤胤もいつしか當惑を感じ出した。そして時々之を戒めた。しかし少しも聞き入れなかつたので、つひに事に託して彼を郷里に歸らしめることにした。それは文政十年、萬が二十七歳の時であつた。」

おもふに、その頃もう平田篤胤は齡五十を越えて居り、且折から浪人の身の上でもあつたので、思想や學說に於ては相當の熱と力とは持つてゐたであらうが、生活に對してはかなり弱くなつてゐたであらうし、その上當時古史成文、古史徵等の著書を、光格天皇並に仁孝上皇に奉つたといふやうな事から、幕府の眼が彼の上に異様に光つてもゐたであらうし、かたゞ、彼の日常生活には相應の用心深さがあつたであらう。隨て思想や學說に對する眞摯と忠實とに於ては大に嘉すべきものがあつたにし

ても、その態度のあまりに危激な點に於ては、生田萬のやうな門下生を膝下に置くといふことは、篤胤にとりては隨分とあぶなつかしい、不安な事であつたに相違ない。

しかし、それであるからといつて、正面からさうした理由で彼を遠ざけやうとすることは、却て彼をして激昂させることになることは、篤胤と雖充分知つてゐたから、つまりは萬をおだて、錦衣を故郷に飾らせるといつたやうな形式で、體よく厄介拂ひをしたのであつた。

「ところが、その頃、生田萬には、もう立派な妻もあり子もあつたのである。妻は同藩香取政徳の女で、名を鎬といひ、文政八年二人の間に生れた男子は、その名を衛門といつた。社會の亡狀に對しては猛虎の如く憤激してゐた彼も、家庭にあつては實に温情抱すべき慈父であり良夫であつたと云はれてゐる。更に子としての彼が如何に孝心の厚い人であつたかも、彼自らの吟詠がよくそれを物語つてゐる。(歌集参照)

「さうした彼が、今やその愛する妻と子とを伴うて、久々で父母の膝下に歸ることになつたのである。そこにはどんなに樂く、あたゝかな新生活の場面が展開されても然るべき筈であつた。おそらく彼自らの心の一角にも、それに向つての切なる念願が燃えてゐたことであらう。

「しかし、やはり彼は彼であつた。「方にさうした家庭生活の温かさに浴しつゝも、他方に於て彼は

やはり飽くまでも時弊に對する反抗と不平との抱懐者たらざるを得なかつた。歸來早々、彼の銳敏な眼は、やはりそこにもあまり多くの不正と暴惡とを見出さずには措かなかつた。激し易い彼の感情は、暫くの黙視をさへ彼にゆるさなかつた。彼は立ちどころに藩政改革に關する意見書を認めた。そしてそれを恰も歸省の手みやけでもあるかの如くに、何の躊躇もなく執政の前に提出した。けれども其意見は保守を生命とする人々にはあまりに激烈に見え、彼の態度はあまりに不遜に感じられた。當局者の激怒は殆んど極度に昂まつた。彼を藩籍より除く機會が忽ちにして成つた。そして何等の假借もなく彼の頭上には放逐の嚴命が下されたのであつた。

「かくして其年の十月、彼は再び年老いた父母を、弟主膳に託し、自らはかよわい妻と子とを伴うて、あてもない流浪の旅に出ることになり、先づ以て刀禰川畔の某處に暫く蟄居することになつた。その當時の彼の悲憤の情は『故郷をやらはれて刀禰川のほとりにてよめる歌並短歌』その他にしみじみと歌はれてゐる。

「けれども彼の其の蟄居生活も永くは續かなかつた。おそらく彼にはさうしてゐるうちに、歸藩をゆるされるやうにでもならうかといふおぼろけながらの期待があつたのであらうが、一向そんな風も見えなかつたので、再び彼は江戸へと志したのであつた。

しかし、江戸でも彼を得つてゐたものは、貧苦と孤獨とだけであつた。世の冷たさを憤り、わが身の貧苦を嘆いた當時の彼の吟詠は、涙なしに讀むことは出来ない。(歌集参照)

さうした窮迫の中で、彼は更に最愛の一子衛門の死に遭つた。その悲痛は彼がこれまで経験して來たいかなる不幸にもまして激しかつた。その折彼の詠んだ哀悼の歌も亦今日なほ私達の胸を打たずには措かないところのものである。

だが、彼の不幸はそれにはとゞまらないで、その翌年更に故郷からの飛脚によつて彼は父信勝の訃を傳へられたのであつた。而も彼は父の訃音に接しながらも、その葬ひの列にすらも加はることの出来ない身の上であつた。彼のその當時の苦悶を歌つた詩歌には、全く断腸のおもひがこめられてゐる。世に逆らひ人と鬪はうとする心がます／＼彼のうちに燃え上りつゝあつたことも、決して無理はない、みづから悲境——正しく生きんと欲するが故を以て置かれた彼の悲境を悲む情が激しくなればなるほど、彼はます／＼雄々しく奮ひ起たうとする心の昂ぶりを感じずしにゐられなかつたに相違ない。打たれゝば打たれるほど彼はます／＼強くならざるを得なかつたのである。

しかし、どうした事か、父の訃音に接した其の年の秋、生田萬は罪を赦されて郷に歸ることが出来た。その折の彼の喜びは全く察するに餘りある。しかも、歸つて見れば、家督は既に弟主膳が継ぎ、

やはり飽くまでも時弊に對する反抗と不平との抱懐者たらざるを得なかつた。歸來早々、彼の銳敏な眼は、やはりそこにもあまり多くの不正と暴惡とを見出さずには措かなかつた。激し易い彼の感情は、暫くの黙視をさへ彼にゆるさなかつた。彼は立ちどころに藩政改革に關する意見書を認めた。そしてそれを恰も歸省の手みやけでもあるかの如くに、何の躊躇もなく執政の前に提出した。けれども其意見は保守を生命とする人々にはあまりに激烈に見え、彼の態度はあまりに不遜に感じられた。當局者の激怒は殆んど極度に昂まつた。彼を藩籍より除く機會が忽ちにして成つた。そして何等の假借もなく彼の頭上には放逐の嚴命が下されたのであつた。

「かくして其年の十月、彼は再び年老いた父母を、弟主膳に託し、自らはかよわい妻と子とを伴うて、あてもない流浪の旅に出ることになり、先づ以て刀禰川畔の某處に暫く蟄居することになつた。その當時の彼の悲憤の情は『故郷をやらはれて刀禰川のほとりにてよめる歌並短歌』その他にしみじみと歌はれてゐる。

「けれども彼の其の蟄居生活も永くは續かなかつた。おそらく彼にはさうしてゐるうちに、歸藩をゆるされるやうにでもならうかといふおぼろけながらの期待があつたのであらうが、一向そんな風も見えなかつたので、再び彼は江戸へと志したのであつた。

しかし、江戸でも彼を得つてゐたものは、貧苦と孤獨とだけであつた。世の冷たさを憤り、わが身の貧苦を嘆いた當時の彼の吟詠は、涙なしに讀むことは出来ない。(歌集参照)

さうした窮迫の中で、彼は更に最愛の一子衛門の死に遭つた。その悲痛は彼がこれまで経験して來たいかなる不幸にもまして激しかつた。その折彼の詠んだ哀悼の歌も亦今日なほ私達の胸を打たずには措かないところのものである。

だが、彼の不幸はそれにはとゞまらないで、その翌年更に故郷からの飛脚によつて彼は父信勝の訃を傳へられたのであつた。而も彼は父の訃音に接しながらも、その葬ひの列にすらも加はることの出来ない身の上であつた。彼のその當時の苦悶を歌つた詩歌には、全く断腸のおもひがこめられてゐる。世に逆らひ人と鬪はうとする心がます／＼彼のうちに燃え上りつゝあつたことも、決して無理はない、みづから悲境——正しく生きんと欲するが故を以て置かれた彼の悲境を悲む情が激しくなればなるほど、彼はます／＼雄々しく奮ひ起たうとする心の昂ぶりを感じずしにゐられなかつたに相違ない。打たれゝば打たれるほど彼はます／＼強くならざるを得なかつたのである。

しかし、どうした事か、父の訃音に接した其の年の秋、生田萬は罪を赦されて郷に歸ることが出来た。その折の彼の喜びは全く察するに餘りある。しかも、歸つて見れば、家督は既に弟主膳が継ぎ、

新主人夫婦の間にはいつの間にか精といふ男兒さへも設けられてゐるのであつた。萬の一旦の喜びは、忽ちにして以前にもました悲憤と變つた。彼は彈かれたやうにして再び江戸へと舞ひ戻つたのであつた。

けれども、その江戸も亦彼には一層住むに苦しい處となつてゐたと見えて、彼は間もなくまた一家を引き拂つて郷國に歸つた。しかし館林へは行かず、新たに新田郡太田町に隠れ住むことにした。彼はそこで靜かに心身の疲れを養ひつゝ、これまでの永い間の研究の結果を纏めて著作三昧の日を送るつもりであつたらしい。その證據には彼がそこに隠れ家を見出したのは、天保三年、即ち彼の三十歳の時であつたが、それから三年後にはもう彼は彼の生涯を通じての大著述であると云はれる「古易大象經傳」十二卷を書き上げてゐるのであつた。

而も彼の此の著書には、彼の師平田篤胤の左の如き序文さへ添へられてゐるのである。

古易大象經傳序

余之於生田萬也。所以誇者一。所以喜者一。而所以大悲者亦有一也。夫天下之所以替我之所是壁立萬仞獨步一世立不易。方獨立不懼者其惟縣居鈴屋二先生乎。余旣篤信古道。從事於斯。奉自彊不息之教。守多識蓄德之道。窮覽萬卷。著述百部。以拾二先生之遺。以稽大九州之古。徵之於神典。符之於古傳。然後涇渭無一滴之濁。燕石無十襲之惑。若夫太昊古易傳、三易由來記、欽命篆象易編亦其一也。從余受業之士亦多矣。授以此書。教以余說。乃能聞一而知二。積小以高大者。某惟生田氏之子乎。蓋有造父王良而後有千里之駿足。有匠石公輪而後有百尺之棟梁。不然則奔逸不應轡策。屈曲不從繩墨。今萬也。其能非駕。其材非駁。不爲險阻泥。不爲風雪狂。不復顧天下之是非之。必須余之一是焉。二先生之有余。余之有萬。皆余之功也。是余之所以誇也。余之爲易也。萬在側。或默識神會若愚。或詰難論辯若冠。余視其可以成業。乃命解大象經。彼未下筆而去於新田山之下。余乃曰。吾易北矣。未幾萬乃撰古易大象經傳。以請閱之序之。余披而讀之。閱而批之。能述余之所既授。又發余之所未教。余乃曰。吾易復南矣。若夫傳則先詳卦象。能釋文義。祖述前言。憲章往行。其總論十首及附錄四篇。皆據太具之真誥而斥文周之妄辯。賴神眞之古道而闢凝聖之陰惡。以裁成余書。以輔相余說。余初爲易以爲天下。若有一是之者。則足矣。今也乃有萬焉。其解釋議論。蹴然可畏革乎。有力猶泛艤艤於大洋。而走乎如山之濶也。其構思屢筆。斐然成章。森如有法。猶蹈華卉於玉階。而昇乎如雲之殿也。凡易之附註。未嘗車載驢負。未知其有幾百家也。今比之於此傳。譬如尺錦鮮於千丈之布。寸劍利於一尋之棒也。天下之所是。不可以非余之所非。余之所非。可以非天下之所是。

矣。余書及說。亦與將自絕編。折植而盡委之焉。吾黨之小子於易。與其問之於萬也。何必余。是余之所以喜也。萬生於上野國。仕於館林侯。忠憤激烈不能自抑。嘗上封事而言制。數度議德行之道。以爲片言隻句有用焉。則死可也。可謂致命遂志矣。用事者。陰沮之。易放之。爾來流離之中。

顛沛之間。乃能撰此傳。以反命於余。又請益。可謂虛已受人矣。彼親給薪水。教授代耕。實與顏回簞瓢之貧。原憲漏濕之困同也。天若使彼有下惟之間鑿石之儲。其著撰豈惟止於此哉。若用彼平文事。可以辯上下定民志矣。若用彼乎武備。可以除戎器。戒不虞矣。然今與商賈居。與農圃遊。無復用之之國憐之之人。但憤逐世無閑之戒。更闢朋友講習之樂。嗚呼天下果非萬。萬自是而不屑也。其豈惟萬之厄哉。抑亦吾道之厄也。是余之所以大悲也。誰哉能爲吾上之於木布之於世。而使余實其所以誇加其所以喜而忘其所以大悲也。昔太昊作易。而來四千百十年。天保五年歲在甲午正月元日癸巳。大壑平篤胤序。男鐵胤謹書。

一旦體よく萬を追ひ出した篤胤が、今更このやうな序文を彼の著書に寄せてゐるのは、一寸奇異の觀がないでもないが、それだけ又此の著述の眞價の高さを明らかにしてゐるものとも見られる。そればかりでなく此の序文を通して篤胤の眼に映じてゐた生田萬の如何なる人物であつたかもよく解つて、甚だ興味を深からしめるものがある。

それは兎に角として、太田町に於ける生田萬の隠栖生活は、これまでになく安らかなものであつたらしい。いつとなしに彼の學徳を傳へ聞いて門下に教を乞ふ者も多く、中にも滋澤子促といふ人の如き自費を以て彼の爲に厚載館と稱する學塾を建てゝくれる者さへ出て來た。

そんな風で、彼の生活はそこに始めて一種の安定を得たわけである。隨つて胸の奥には尊王の大義に基いて世を一新せざに措かぬといふやうな熱烈な願望を藏しながらも、學徒としての恵まれた現在の環境は、彼の心の異常な昂奮を日一日和らげつゝあつた。そして徳川幕府の亡狀に對する彼の憤激も、藩政の墮落に對する彼の悲憤も、亦藩の當路者達の自分に對して執つた頗劣な所置に對する彼の激怒も、いつとなしに彼の胸を浪立たせなくなつてゐた。^{（まゝ）}

もし、生田萬にして、そのまゝ靜に太田町に於ける隠栖生活を續けたとしたら、彼はおそらく學者としてかなりに大きな功績とかなりに高い名聲を、今日までも遺すことが出來たであらう。更に或は彼の師平田篤胤が嘗て彼について語つたといふ如く、彼は伊吹廻舍の最も光輝ある後繼者として、平田學の一方の權威として、學界に重きをなすことが出來たかも知れない。それとも持つて生れた彼の熱狂性と、彼の尊王復古思想とが相俟つて、結局彼は疊の上で死に得ねない人間であつたらうか。しかるに、運命はあまりに意外な方向へと彼を歩ませた。太田町に隠栖の根據を定めてから僅に五

年にして、かれ生田萬は殆んど全く偶然にも、そこを去つて越後柏崎に移住することになり、而もそこで全く夢想だもしなかつた生涯の大團圓にぶつかることになつたのであつた。

三

そもそも生田萬が越後の柏崎に来るやうになつたのは、その町の訪諱神社の神職をつとめてゐた樋口出羽（名は英哲）の懇望によるところであつた。

此の樋口英哲といふのは、生田萬が江戸の平田篤胤の門下に學んでゐた頃の同門の學友であつた。樋口はその頃から妙に萬を敬慕し、師以上になつてゐた。生田も亦樋口を弟のやうに愛してゐた。そしてその後樋口が歸郷し、生田も江戸を引拂ひ、二人は山河百里を隔て住むことになつたのであるが、それでもなほ兩者の交情はます／＼深くなるばかりであつた。二人の間には頻繁に音信が取りかはされてゐた。

ところが、天保六年の冬、下野の太田町なる生田萬から樋口英哲の許に届いた音信に、そのうち折を見て越後へ遊歴に出かけたいといふことが書かれてあつた。これを讀んだ樋口の喜びは非常なものであつた。そして早速それをきつかけに、あらゆる誘引の言葉を萬の許へ書き送り、頻りに其の遊意

をそゝつたのであつた。

そんなわけで、翌天保七年の初夏、生田萬はいよいよ越後への旅を決行することになつた。しかし、その旅行が萬自身にとりて、單に慰樂のみを目的とした漫遊でなかつたことは、その折彼が所持の白扇にしたためたといふ次の如き長歌によつても窺ひ知ることが出来る。

しらとほふ、をにひた山の、守る山の、麓の庵を、あぢむらの、朝立出て、遠々し、越の國邊へ、百傳ふ、いつのちわきに、山川を、岩根さゝみて、ふみ通り、國見もしつつ、さひつるや、唐のしこゞと、立すくみ、中子がをその、天きらふ、八重棚雲と、立おほひ、かをりみてるを、科戸邊の、御靈たはりて、ぬば玉の、夜もつくに邊へ、かむながら、氣吹放ちて、魂ちはふ、神代の道を、天そゝる、山より高く、さくななり、瀧より清く、のべあかし、とき示さむと、○の神、あすはの神に、幣おきて、いはひをろがみ、草まくら、旅行く吾を、朝こゆる、山もなびかひ、夕わたる、川もよどまず、ふち駒の、耳ぶりたてゝ、聞しめせといふ。

まさきくと妹や祈らむ子やこひむかへり見しつゝ踏なづみゆく

即ち彼が此の度の旅行も、つまりは天下にはびこつてゐる支那や印度から外來の惡思想を排して、神ながらの正道を人々に述べあかし説き示さむが爲で、自分は今やその貴き使徒として出かけるのであ

る——かういふのが彼の抱負であつた。

かくの如くして、萬が柏崎に着いたのは、その年の五月十四日であつた。宿は無論樋口英哲の宅であつた。彼はそこに二三十日間滞在し、その間にその地の重立つた人々の大半と面識を交へた。それらの人々の多くは、どちらかといへば資産の豊かな方の人々で、いづれも風流に心を寄せてゐた。彼等は何よりも此の遠來の學者の學識の該博と、詩才の豊富とに敬服した。或は詩苑に、或は歌會に、人々は心をつくして彼を歓待した。由來兎角不遇の境界に置かれ勝ちであつた彼には、多くの人々からこれほど温かな歓待を受けたことは、おそらく空前の事であつたらう。隨て彼のその間の得意と、愉快とは、おそらく彼にとりては夢のやうにさへ感じられたであらう。そして彼の胸底に蟠つてゐた不平も、反抗も、おそらくその折ばかりは影をひそめたことであつたらう。

しかし、皮肉なことには、慨世家生田萬がそのやうにして多數の雅客達に取巻かれて、ひたすら風流の甘味に浸つてゐた時は、その地方ばかりでなく殆んど全國に亘つて、稀代の飢饉が漸くその慘状の極に達せんとしつゝある時であつた。

その場合の生田萬は、果してさうした飢饉の慘状を目撃したであらうか。少くともそれについての噂話位は聞いたであらうか。それは今知るよしもないが、兎に角彼は、人々の引きとめるのも聞かず

に、滯在僅に二三十日で、飄然として歸り去つたのであつた。

しかし、こゝでも亦私達は運命の不意譲を思はせられる。一旦そんな風にして柏崎を去つて下野太田の厚載館へと歸つた生田萬にして、若しそのまゝ再び柏崎を訪れるやうなことがなかつたとしたら、彼と柏崎との關係も極めて淡いまゝに終り、今日では殆ど誰知る者もなくなつてゐたであらう。ところが、彼が僅に二三十日しか滯在しなかつた其の柏崎に、どうしたわけか彼は意外に多數の、しかもまだ熱心な崇拜者を得たのであつた。そしてそれら多數の熱心な崇拜者の懇望によつて、彼は再び其年の九月妻子を伴うて柏崎に假住することになつたのであつた。

柏崎に着いた生田萬の一家は、彼と妻の鎬女と、それから四歳と一歳の女兒二人であつた。しかし、彼は決して永住の目的などあつたわけではなく、ほんの一、二年そこに留つて人々の望むまゝに學を講じ、やがてはもとより永住の地と定めた下野太田町へと歸るつもりであつたことは明らかである。

そこで最初彼等一家の寓居に當てられたのは丁字屋といふ旅舎であつたが、そこでは何かに不都合だといふので、間もなく山田小路といふところの借家に移され、そこでいよいよ櫻園と號する塾が開かれたのである。

この櫻園に集つた門人は凡そ二十餘名で、なほ遠く蒲原地方の人々で文書を以て教を乞うてゐた者

も少くなかつた。けれども又中には、生田萬の人相に脅えたり、その入門の手續や教授法のあまりに峻厳なのに怖れを抱いたりして、近づかうとして却て遠ざかつた人々もかなり多くあつたらしい。四角額の太り肉で、眉間に長刀底があり、眼光鋭くどことなく殺氣を帯びた彼の人相は、常人には何となく物悽く感じられてゐたといふことである。

しかし、進んで彼の周囲に集つた人々からは、彼は不思議なほど誠實な敬慕を捧げられてゐた。彼の妻鎬女も亦彼に事ふるに貞淑至らざるの觀があつた。そんな風で、柏崎に於ける生田萬一家の生活は、太田町に於けると同じく甚だ平和であつた。最初の越後入りに於て彼のひそかに持つてゐた「神代の道を、天そゝる、山より高く、さくなだり瀧より清く、述あかし、説き示さん……」といふやうな彼の抱負も、初めて文字通りに實現される機會を得たわけである。

四

ところが、生田萬が初めて遊歴を試みた頃既にかなりの慘状を呈してゐた柏崎地方の飢饉状態は、その頃に至つていよいよその頂點に達しかけてゐた。此の天保年度の飢饉は實に全國的のものであつて、いかに米の國を以て誇つてゐる越後でも、その災厄から免れるることは出來なかつた。

そもそも此の天保年間の飢饉といふのは、元年から引きつゞいての凶作で、連年公私救助米若くは廉價米によつて辛うじて一般人民の路命をつなぎ得て來たのであつたが、七年から八年にかけては全くその極點に達し、殊に八年に至つては諸藩の布いてゐた防穀令の効果も空しく、各藩皆義倉公稟空乏し、賑郵救拯の道も盡き果てたやうなわけで、全國到るところ餓殍路に充ち、倒死累々たる慘状を呈するに至つたのであつた。

かうしたむごたらしい現實の世相は、櫻園の書屋に隠れて、靜に書を講じてゐた生田萬の眼にも映らずにゐなかつた。昨夜はどこで放火があつた、今朝はどこで倒死者があつた、或は何、或は何と、さまぐな悲惨な世間話さへも、自然頻々として生田一家の者の耳に傳へられた。時にはその家の門前に立つて、堪へられぬ飢餓を訴へる者さへも相次いで出て來るやうになつた。

折も折、こんな奇怪な噂が喧傳された。それは、江戸高輪の豪商千波太郎兵衛といふ者が、手代五人に十萬兩といふ莫大な黄金を持たせてひそかに越後に派し、盛に賄賂を使つて役人と結託し、以て越後に残つてゐる米を片端から買ひ占めてゐるといふことであつた。それからぬか天保八年四月下旬には俄然米價が金十兩に六俵八分といふ高値になり、更に五月に入つては十兩に四俵といふ突飛な暴騰を見るに至つた。

これでは一般の人民は到底やり切れる筈がなく、たゞもう餓死を待つより外に仕方がなかつた。彼等は考へた。これは畢竟米がないからでなくて、在る米をどしきへ國へ流出するからに外ならぬと。そこで彼等は先づお上へと哀訴し、能ふかぎり米を他國へ移出しないやうに取計らつて貰ふことにしてゐた。しかし、多くの役人や豪農や商人の中には、却てさうした機會を利用して、自己本位の非利を食らうとする暴奸な者も少くなかつた。それやこれやで窮乏の極に達した民衆の心は、刻々に一種の險惡な不安状態にまで陥らずにはゐなかつた。

しかも、その折も折、天保八年二月には、大阪に於て勃發した大鹽平八郎一味の騒動が報じられた。さらでだに不安動搖を極めつゝあつた此の地方の民心にとりては、これはまさしく此上ない脅威でもあり、且一種の示唆でもあつた。何事が怖ろしい事件が持ち上るのではなからうかといふ暗黒な不安と恐怖との爲に上下たゞ騒然たるばかりであつた。

折から何人の所爲かわからなかつたが、柏崎の街に諸所に、頻々として不穏な文句をつらねた落し文をして歩く者が現れた。その落し文は題して「國恩に報じ困窮を救ふ一心よりの所爲」といひ、地方窮民の慘状を訴へ、その因て來るところの原因を曝露し、最後の手段として大衆の結束を促し、奸商悪吏の膺懲を煽動した、不穏極まる宣傳文書であつた。(此の落し文の全文は本書の附録「生田の旗

風」中に掲げられてある。)

なほ文中特に「大鹽平八郎様之事は堅く禁制の事」と書いてあるが、然し之は明らかに大阪に於ける大鹽一黨の所爲に倣うたものに外ならなかつた。此の飛檄の張本人は果して何人であつたかは、つひに知るよしもなかつたが、後日誰いふとなく之を「生田の落し文」と稱した。

いづれにしても、生田萬が、折も折、さうした場合に柏崎に來合せたといふことは、あまりといへばあまりに妙な廻り合せであつた。もとへ彼がはるべく柏崎にまでやつて來たのは、主として書を講じ、詩歌の道を弘めるが爲であつた。且又自分から進んで來たのではなくて、むしろ其の地の崇拜者達の懇望によつてやむを得ず來たのであつた。あやまれる外來思想の蒙を啓き、敬神尊王の大義を人々に説き示さうとする熱烈なる抱負は無論あつたが、しかし特に彼が柏崎の地を選んで移り住むに至つたのは、決して彼の自發的行動でなかつたことは明らかである。

けれども元來熱し易く激し易きは彼の本性であつた。さうした彼が如何に旅の空とは云へ、目のあたり生民糊口に窮する慘状を見せつけられては、到底彼として徒らに手を懷ろにしてゐることが出来なかつたに違ひない。かの落し文の主が果して生田萬であつたかどうかは別としても、少くとも彼が陣屋詰の諸士中の懇意な者等を通じて、幾度となく熱心に窮民救恤の方策を献じたことだけは明らか

な事實であつた。それにも拘らず、世の成行は日一日と彼の求むるところと反対の方向へと惡變して行つた。つひに彼が「俗吏事を謀るに足らず」として、奮然一切を忘れて蹶起するに至つたのも、またやむを得ざる結果といはなければなるまい。

五

それは天保八年五月九日のことであつた。生田萬は突然樋口英哲の許を訪ね、明日自分は三條に赴き、その地の神職藤崎丹後方を訪ね、場合によつては半月餘遊んで來ることになるから、留守をよろしく頼む旨を告げた。そしてその翌日門人山岸加藤治を伴うて彼は飄然として柏崎から姿を消した。三條では、彼は先づ豫定通り神主藤崎丹後方を訪ね、暫くそこに滞在してから新潟へと遊びに行き、歸來三條町大庄屋宮崎義左衛門方にあつて子弟等に皇學の教授をしてゐた。

しかし、さうした間にも彼は劃策を怠らなかつたものと見え、つひに五月三十日同志鷺尾甚助、鈴木誠之助、小野澤佐右衛門、古田龜一郎、山岸加藤治の五人と共に、西蒲原郡間瀬から舟に乗り、夜の九ツ過ぎに刈羽郡荒濱に上陸し、その夜直ちに富豪の家數四を襲ひ、或は火を放つて家を焼き、或は金銀穀物の類を強奪し、慌て騒ぐ村民の前に奪つた物を一切投げ出し與へ、更に大鹽の一黨が暴吏

を懲し、窮氓を救ふのだから賑郵に預りたいものはついて來るやうにとの揚言の下に、彼等は夜暗を冒して堂々と柏崎へと乗り込んだのであつた。

同勢は同志六人の外に、荒濱の村民八人、船頭一人を加へて都合十五人であつた。彼等は二流の旗を樹て、先導とした。その旗の一つには

奉_二天命_一誅_二國賊_一

の六文字が書かれ、他の一つには

集_二忠臣_一救_二窮民_一

と書かれた。

彼等が柏崎に着いたのは、翌六月一日まだ夜の明けきらぬ頃であつた。彼等は先づ鷺尾甚助と古田龜一郎の二人を鶴川橋の上に留まさせて市民の救援に備へ、生田萬以下他の三人が直に代官所を襲ひ、火を放つて呐喊し、今にも武庫を破り兵器を奪はうとするところまで行つた。役人達が出て来て戦つたけれども、鈴木誠之助の爲に見るゝ數人が斬られたので、皆逃げ腰になつてしまひ、反対に同志の勢は益々募るばかりであつた。

しかし、變を聞いて駆けつける者が、つぎくゝその數を増し、大勢が左右から挟み撃ちにかかり、

ので、流石の鈴木誠之助もつひに敵することが出来ないで、先づ以て斃れてしまひ、續いて生田萬も重傷を負うて進退の自由を失ふに至つた。之を見てとつた山岸加藤治は

「天下の義士を醜吏の手に死なせてなるものか」と叫びさま、傷いた萬を肩にかけて逃げ出したが、途中で鷺尾甚助、古田龜一郎の二人と出遇つたので、相伴うて海濱に遁れた。

さすが負けぬ氣の生田萬も、事茲に至つては如何ともしがたいので、海濱に至るや否や砂上に座して屠腹した。その折も折銃丸が飛んで来て、龜一郎を殪した。之を見た他の人々も、いよいよ萬事休すと叫んで、次々に自殺した。しかし、鷺尾甚助だけは唯一人後に残つて皆の介錯をし、更に萬の首を抱いて悠々そこを立ち去つた。彼は果して萬の首をどこに葬つたであらうか。兎に角彼は最後に江戸に出て、暴起亂入の顛末を逐一自訴に及び、牢獄につながれて病死したのであつた。

ところで、それ以外最も悲痛を極めたのは、生田萬の妻鎬女及びその二兒の最後であつた。

萬は當時三十七歳、妻の鎬女は三十一歳で、二人の間には五歳と二歳の二女があつた。其事のあつた日の朝、鎬女は人傳へに今朝未明何者か陣屋に亂入した大騒動があつたといふことを聞き、早速家主であつた山田方へ見舞に赴いた。そして折から其家で焚出しすべく大釜に飯を焚き、女中共が集つて握飯をこしらへるのに忙く働いてゐるのを見て、彼女も何氣なくその手傳ひをしてゐた。そこへ捕

手の役人がやつて來たのであつた。

しかし、彼女はその場で捕へられるのを潔しとしないで、一旦自宅に歸り、容を改めたり、二女兒にそれとなく訓誡を興へたりした上で從容として縛に就いた。そして獄中に呻吟すること三日、その三日目の夜獄吏の目を喰んで二人の女兒を手拭で絞め殺し、自らは細紐で膝をしばり、端座のまゝ舌を噛み切つて自殺を遂げたのであつた。彼女は夫の所爲については少しも興り知らなかつたらしい。

鎬女も亦いくらか歌を詠んだらしいが、今日まで私の見たのは、左の三首しかない。

寄雪哀傷歌

雪よりも脆きは君がいのち毛の筆の跡のみ消えのこるかな

烈女不見二夫

手弱女の數ならぬ身も一筋に迷ひは入らじ背の山の道

忠臣不事二君

武士の手ならず弓に一筋をかけてひかめや大和たましひ

扱て大體以上の如くして生田萬の企てた暴舉は、その事自らとしては失敗に終つたのであるが、しかし、その事あつた翌日から、米價頓に暴落し、富豪は争うて倉稟を開き、爲に窮民悉く蘇生の歡び

を得たといふのであるから、萬の義舉は充分にその目的を達することを得たといつてよい。義人としての生田萬の名が年を経ていよ／＼その光輝を増し來つた所以である。

生田萬の墓は今柏崎の町うちにある。それは明治八年に平田篤胤の子鐵胤の門人村山鼎といふ人が、樋口英哲の後なる樋口秀實と相謀つて建てたものである。更に明治三十一年に同町八坂神社境内に、神道碑と題する生田萬頌徳碑が建てられた。題額も撰文も共に品川彌二郎によつてなされ、揮毫は織田完之が之に當つた。碑面の全文は次の如くである。

『天保八年。越後國柏崎民大饑。時有生田先生殺身成仁之學矣。丐子尙欲報恩。况里人乎。今井茂作石黒久助等。首唱植碑。請予文。按先生姓菅原。諱國秀。字救卿。號東華。後改名萬。上州館林侯松平齊厚臣生田信勝君之長子也。天資英邁。狀貌魁梧。才兼文武。慷慨好義。學通和漢。識量傑出。善翰墨。妙詩歌。文政七年。入平田篤胤翁門。專脩古道學。撰二千文。翕喜其雋志。誘掖特異。最精古易。作大象經傳。其他著述不遑枚舉。嘗慨皇室式微。憤幕府專制。讓家弟廉。坎輶有年。下帷柏崎。門人大進。天保丁酉。餓莩橫路。衆民連署。屢請賑濟。有司弗納。剩與奸商營利。米價倍昂。於是先生蹶起。往加茂。與鷺尾甚助。鈴木誠之助。小野澤佐左衛門。古田龜一郎。山岸加藤治。熊倉立道等謀。自出雲崎放船六月朔昧爽着荒濱。渡惡田川。急襲柏崎治所。所轄披靡。胥吏狼狽。亂發銃砲。先生力戰。蒙重創。鷺尾甚助大呼曰。天下名士。不可死于醜吏之手。扶肩而出。先生歿年三十七。妻香取氏字鎬。有節操。獄中絞二兒齧舌而死。年三十一。長五歲。次三歲。先生舉事之翌日。米價頓低。饑民悉蘇。銘曰

絕世文章和漢學。

夙著二千四百言。

道通宇宙幽明理。

志酬天壤無彊恩。

仰觀乾象飛霽處。

盡殲血肉救黎元。

里老慕仁長致祭。

丐子寄金留淚痕。

なほ碑の背面には、柏陽内山大觀老人の名を以て左の如く誌されてある。

平八宗吾共殺身。

堂々義舉卽成仁。

萬公亦殉國家事。

宜矣千秋祭祀新。

ところで、此碑を建てるに至つた動機には誠に涙ぐましい美談がある。それは碑文中にも「丐子尙欲報恩、況里人乎」と書かれて居る如く、生前生田萬に助けられた一人の乞食が、その恩に報いんが爲貰つた錢の中から少しづゝ貯へて置いた四圓を、死に當つて遺言と共に其子に譲り、更にその子

から生田先生の建碑の資の一部にもと柏崎の某氏へこまぐと書いた手紙と共に送つて來たといふ世にも稀な美しい話である。

この事についての詳しい話は「生田の旗風」に書かれてゐるからこゝには略して置くが、兎に角此の一事を以てしても生田萬その人の徳の高さは私達に感激を與へずには措かない。

六

三島中洲の生田萬を詠じた詩に次の如き一首がある。

救飢無レ術悶難排。

漫作亂民驚市街。

學不レ誤人人誤レ學。

越陽亦出小中齊。

これは正しく生田萬を以て大鹽平八郎と同じく誤れる陽明學徒の一人と判じたものであり、且彼の義舉を以て漫りに亂民を作つて市街を驚かしたものと断じたものであるが、生田萬は果してその如く誤れる陽明學徒であつたであらうか。

之に對しては私は斷じて「否」と答へるに躊躇しない者である。それは今ここに公にする彼の歌集を讀む人の悉くがおそらく同意するところであらうと思ふ。

いかにも生田萬は少青年時代に於ては、主として漢學によつて思想を養はれた。陽明の學もその當時に於ては少なからず彼の心を動かした形跡がないではない。しかし、後に、彼自ら歌つてゐるやうに、彼が長じて眞淵、宣長の書を読み、更に平田の學に親しむに及んで、彼の思想は根柢から覆へされたのであつた。そして全く反対に彼は印度や支那からの外來思想に對する熱烈なる反逆者となつたのであつた。

この事については「北越詩話」の著者故人坂口五峰も次の如く論じたことがあつた。

「予大中道人漫稿三卷、草稿二卷を檢するに往々經を論ずるものなきにあらざるも、一として王學に涉るもの無し。而して其蘊無量に與へし書を見れば、却て朱學を奉するものに似たり。則ち所謂大中經亦闇齊の神學に據りて篤胤の古學を參取し、以て敬神尊王の義を明にせんと欲せしものにあらざる無きか。」

この方がむしろ當を得た見解であると思ふ。

要するに私達の眼に映する生田萬は、徹頭徹尾敬神尊王思想、篤胤の所謂神ながらの道に燃えた熱血兒に外ならない。又さうした思想の抱懷者としての彼は、決して單なる講學の徒でなくして、むしろその實現に向つて焦燥しつつあつた代表的な勤王志士の一人であつた。

かくの如き彼が大鹽中齊の亞流であり、誤れる陽明學徒の一人であるが如く傳へられるに至つたのは、主として彼の最後の義舉が大鹽のそれに引きついでいる事であり、且彼等同志が方便の爲に「大鹽の殘黨云々」の語を發したりした事が禍してゐることは、むしろ彼の爲に誠に惜むべきことである。

世の人は踏みもわけずやさもあらばあれ我ひとりゆく神のまさ道
結局生田萬の抱負はこの一首の歌に盡きてゐたといつてよい。

而も嘗て私が断じた如く、彼は彼の思想に殉せまして、持つて生れた彼の氣前に殉りだ。最後の彼の暴舉は、彼の思想を根柢としてゐたといふよりは、寧ろ彼の熱し易く激し易い性情と、彼の俠氣との突發に外ならなかつたのである。

七

生田萬の著書は、少くとも古易大象經傳、十二卷神易大象經傳二冊、大中道人譲稿五卷、鏡室の面影一冊以下二十餘種はあつたらしい。しかし、その中で、彼の詩を收めたものは、大中道人譲稿と生田萬草稿との二種、歌を收めたものは、加賀美能牟呂乃於毛迦宜と前記草稿との二種に過ぎない。しかも、そのいづれも彼の少壯時代から三十四五歳に至るまでの作だけであつて、彼が越後柏崎に來てから後の詩や歌を收めたものを見ることの出来ないのは、遺憾に堪へない。

彼の詩は少壯時代の作が多數を占めてゐる故もあらうが、大體に於てなほ未だ生硬の域を脱してゐないやうである。「北越詩話」の著者も、「語多くは膚廓。未だ李王の餘習を脱せず」と評してゐる。

しかし、技巧の上にはさうした不満が多分にあるとはいへ、生田萬その人を知る上には是非とも彼の詩を讀まなければならない。彼の思想、彼の不平、彼の悲憤、彼の人生觀は、遺憾なく彼の詩集の至るところに流露してゐる。不遇世に容れられなかつた熱血兒生田萬の面目はそこに躍如たるものがある。當時の社會に對して彼の抱いてゐた不平不満の何ものであつたかも彼の詩が最もよく物語つてゐる。

彼の詩に比べると、彼の歌は遙にその體を成してゐる。歌は二十歳を越えてから詠み始めたらしいが、それにしても彼の二十二歳の時に書いた「夢路の記」中に收められた歌の如きは、實に立派なものである。その後彼は平田篤胤の門に入つて専心國學を學んだのであるから、歌に於ても年一年修練の積まれて行つたことは云ふまでもない。

しかし、大體に於て題詠の歌には型に囚はれた凡作が多い。言葉の操縱は要を得て居ても、どうも生氣に缺けてゐる。之に反して彼の折々の實感を詠じた歌を見ると、まるで別人の作であるが如き生

氣が充ち溢れてゐる。いたづらに巧みを弄するといふやうなところは少しもなく、一氣におもひを歌ひ通した彼の所謂「ますらをぶり」の歌には、當時の一流の歌人の作に比しても遜色のない優秀な作が甚だ多い。自然を詠じた作に於ても、題詠でない彼の作には今日なほ私達をして敬服せしめるに足る作が少くない。歌人としての生田萬の名も、近世和歌史上の一角を與へられるに充分な品位と價値とを持つてゐると信ずる。

彼は又書に於ても優れてゐた。彼が空海、道風などの墨蹟を臨摹したものも存してゐるところを見ると、習字に於ても彼は常に修行を怠らなかつたらしい。いづれにしても、彼の文字の美しさは非凡である。癖やいやみのない高雅な、なつかしみのある彼の文字を見ると、彼は決して粗暴な人間ではなかつたらしい。私は嘗て彼の書を評してこんなことを云つたことさへある。

「彼の本性にはおそらく書に現れたやうな高雅な一面があつたにちがひない。しかも、彼の生活に於ては、それが一種の潔癖となつて周囲の亂雜さに對する嫌惡の爲に彼を苦ませもしたであらう。彼自筆の歌集一巻について見ても、彼の几帳面や潔癖があまりによくわかる。」

此の歌集は、いつ頃編まれたものであるかわからぬが、長短歌五百首を生田萬自ら書き集めたものである。巻首に「生田首印」といふ四角な白字の印章が捺さつてある。或は之は他日このまゝ版に付すつもりでさもあつたらうか、文字の配列なり一字々々の書き方なりが、直に版下にして充分なほど几帳面に書かれてある。これだけを書くには、到底三日や四日の仕事ではなかつたらうが、いかにも根氣よく書けたものである。どこを見ても、あわてたり、急いだり、飽いたりしたやうな跡はない。これを書いた人のどこに心の不満や焦燥があるのかと思はれるほどに、それは立派なものである。

生田萬といふ人を知る上には、私達はかうした一面をも見遁してはならないのである。

(昭和四年六月九日稿了)

生田萬歌集